

和名：ニセネコブセンチュウ
学名：*Nacobbus aberrans* (Thorne)
英名：false root-knot nematode

分布

インド、英国、オランダ、フィンランド、旧ソ連、米国(ハワイ諸島を除く。)、メキシコ、アルゼンチン、チリ等

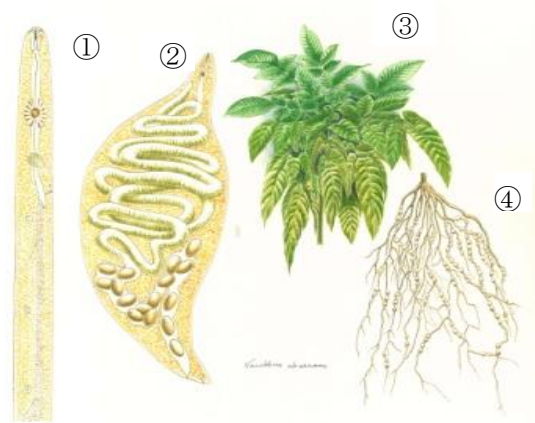


図 ニセネコブセンチュウ

- ①未成熟雌の前部、②成熟雌の虫体、
③ジャガイモ地上部の被害症状、
④地下部のこぶ症状

寄主植物

トマト、ジャガイモ、フダンソウ属、一部のサボテン類の生植物の地下部

形態

雌成虫は未成熟期に糸状であるが、成熟するに従い乳白色の紡錘形～やや膨れた形で体の前方部と後方部が先細の体型に変化し、体長は700～1900μmである。雄成虫は糸状で未成熟期の雌成虫に似ているが、明瞭な交接のう（尾翼）がある。体長は、700～900μmで尾が短く小さい。2期幼虫は糸状で体長は300～380μm、口針は太くて明瞭である。

生態

本種は、植物体地下部の組織内に寄生する内部寄生の線虫で、ジャガイモでは塊茎に寄生する。各令期の幼虫および未成熟な雌成虫はすべて組織内に侵入することができる。幼虫は、根の伸長部分から侵入し養分を摂食しながら成長する。未熟成虫になるころには、寄主植物の根が衰弱し、組織内を移動しながら摂食を続けるか、いったん土壤中に遊出する。土壤虫に遊出した未成熟期の雌成虫は再度根に侵入して寄生する。未成熟期の雌成虫は、組織内に定着して成長を続け、紡錘状に成熟・肥大して根にゴールを形成する。さらに成熟が進むと、根の表面に突出したゼラチン状物質を排出しその中に数百個の卵を産む。

被害

本種は、寄生根にゴールを形成する。寄生した線虫が多いと不連続な数珠状となり、ひげ根を生じることがある。根に本種が寄生すると養水分の吸収が妨げられ、細根の枯死や根系全体の発育阻害が起こる。また、地上部にも黄化や萎凋等の症状が現れ収量が著しく減少する。ペルーのジャガイモ栽培地帯では、本種の寄生による55～90%の減収事例が報告されている。